

氏名	磯野 巧		
学位の種類	博 士 (理 学)		
学位記番号	博 甲 第 7537 号		
学位授与年月日	平成 27年 7月 24日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	Structural Change of Tourist Destinations through Developing the Geopark Movement in Australia (オーストラリアにおけるジオパーク運動の進展にともなう観光地域の構造変化)		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	呉羽 正昭
副査	筑波大学教授	博士 (理学)	松井 圭介
副査	筑波大学准教授	博士 (理学)	堤 純
副査	筑波大学助教	博士 (理学)	山下 亜紀郎

論 文 の 要 旨

本研究の目的は、オーストラリアのカナウインカ地域において、ジオパーク運動の進展にともない観光地域がいかなる構造変化を遂げてきたのかを解明することである。本研究でいうジオパーク運動は、ジオツーリズムの導入以降、ジオパークの構想・準備期間における、ジオパーク加盟申請および認定以降における地域の活動のことを指す。

1950年代以降、先進国ではマス・ツーリズムが発達し、自然地域はその目的地として重要視された。しかし、1980年代になるとマス・ツーリズムの弊害、とくに大規模開発にともなう自然環境の破壊や歴史・文化の喪失が問題視されるようになった。こうした状況下、その弊害を克服する観光形態として、オルタナティブ・ツーリズムの考え方に注目が集まった。また同時に、ツーリズムの持続可能性が重視されるようになると、観光目的地の自律性、地域マネジメント、ガバナンスが重要な研究視点になってきた。オルタナティブ・ツーリズムの例として自然地域を対象としたエコツーリズムがあげられるが、時間の経過とともにさまざまな形態が認識されてきた。ジオツーリズムは最近約20年間で注目度を高めた形態であり、本研究はそれが実践される場としてのジオパークを対象にする。

ジオパーク運動は地域振興と結びつけられて導入されることが多く、ジオパークと地域との関係を体系的に整理・検討する研究視角が重要である。しかし、地理学においてジオパークの人文的側面に注目した研究は少なく、その関係を追究する分析的な研究が必要となっている。ジオパークの構成要素は、運営の担い手としての「人」、資源としての「ジオサイト」、ジオパーク運営を支援する「LGA (Local Government Area 自治体)」であり、これらの構成要素がジオパーク運動とどのように関わっているのかを解明することは、ジオパークと地域との関係を整理する重要な研究視点である。本研究では、この関係の変化を検討することで、観光地域の構造変化を解明しようとしている。

オーストラリアは世界的なジオツーリズムの先進地で、多くのジオサイトが、連邦政府や地理学者・地質学者によって大地の遺産として保全・評価の対象とされてきた。同国南東部のカナウインカ地域は、ス

コリア丘やマールなどの火山景観が卓越するジオパークである。ここでは、ジオパーク運動を推進するための政策が早期より開始され、それにともなう観光地域の構造変化を解明する対象として適している。具体的には、カナウインカ地域において、ジオパーク運動が展開する中で、人、資源（ジオサイト）、LGAがジオパークとどのようにかかわってきたのかについて、現地調査に基づいて動態的に分析した。その結果、次のことが明らかになった。

カナウインカ地域では、火山景観を構成するジオサイトに基づく広域的な観光振興がみられ、2000年代以降はジオパークとしての活動が中心となった。そこでは、対面接触によって多様なアクター間の合意形成がなされ、ガバナンスによる合意形成を通してジオパーク運動が展開してきた。しかし、カナウインカ地域の観光者数規模は相対的に小さいため、地域内のLGAは観光地域としての条件不利性を共通課題として認識し、その克服を目的にジオパーク運営に対して財政支援を行ってきている。カナウインカ地域には56のジオサイトが点在するが、いくつかの地区では、複数のジオサイトを結びつけて、博物館などを基盤とする充実したインタープリテーション機能を付加しながら、ジオサイトを巡る周遊型の観光地域が形成されてきた。

ジオパーク運動の進展にともなうカナウインカ地域の構造変化は、対面接触を重視したガバナンスによる組織運営の形成、ジオサイトの点的利用から線的、面的利用への拡大、ジオパーク運動に対するLGAのまなざしの変化、これら3つの側面によってもたらされていることが明らかとなった。また、ジオパーク運動を介したオルタナティブ・ツーリズム型の観光地域は、インタープリテーション機能と組み合わせられることによって観光資源の有効な利用法が確立され、これを通して「学ぶ観光」が実践される場として形成されてきたことが示された。

審 査 の 要 旨

本研究において、これまで地理学の分野で十分に解明がなされてこなかったジオパークの人文的側面を扱った点、ジオパーク運動の進展にともなう観光地域の構造変化を解明した点は、オリジナリティとして高く評価される。とくに、ジオツーリズムについて、およびその対象としてのジオパークについて地域的な観点から研究視角を示した点は、地誌学の研究発展に大きく貢献するものである。また、ジオパーク運動について、人、ジオサイト、自治体という3つの主体の係わりとともに関係性を分析し、観光地域の構造変化をさまざまな地域条件と関連づけて説明した研究方法も適確である。こうした研究方法は、日本のみならず世界のジオパークに関する今後の研究にも応用されるといった点で意義がある。さらに、自然地域におけるツーリズム研究において、インタープリテーション機能や周遊性を強調した分析視点は、観光地域研究の分野に新たな方法論を加えるものである。本研究は、オーストラリアのカナウインカ地域において、ジオパーク運動に関係する自治体や関係組織において、ジオサイトの管理・運営や観光利用に関する内容について長時間をかけて詳細な聞き取り調査を実施し、それに基づいた実証的な研究である。海外で丹念にフィールドワークを実践したことは、困難な研究対象に挑戦したという点で高く評価される。以上の点から、本研究はジオパークに関する重要な研究として位置づけられ、博士論文として十分な価値があると認められる。

平成27年6月16日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。